

吉村先生を偲んで

(2007年5月の学力テスト講評の塾内報に記載した内容に加筆したものです)

■ 故、吉村先生へのご弔意にお礼申し上げます ■

吉村本人の希望もあり、生前、病気のことを保護者・生徒には詳しくは語りませんでした。心配をかけたくない、という思いからだったのでしょう。

12年前の1995年4月に入社し、その年の12月に結核となり緊急入院。翌年の4月に退院するも翌5月には交通事故(重傷)で3ヶ月の入院。2000年の5月から半年のアメリカ留学を契機に退職し、留学後は非常勤講師(アルバイト)として勤務を続けてくれました。留学直後の2001年2月に卵巣がん(末期の進行がん)により緊急手術。以後、化学療法(抗ガン剤治療)と手術を繰り返し、奇跡的に回復し1年後の2002年3月には職場復帰を果たしました。大きなオペを2回したため、後遺症に苦しんでおりました。2005年に再発。ほぼ1年の治療と手術では十分な処置が出来ないまま経過観察となっていました。2006年8月には腫瘍マーカー値が100を超えたため再々発が確定。化学療法が始まりましたが、10月にはマーカー値がすでに1000を超えていました。転移はすでに広範に及んでおり、手術もできない状態であったにもかかわらず、「先生、今度はどうもヤバイです」と明るく言っていました……。2006年12月には転移した肺で肺気腫を発症。呼吸障害を起こしながら2週間に1回程度、肺にたまった水(毎回1リットル)を抜き出すことの繰り返しでした。そのような中でゼイゼイと苦しもうにしながら先月の2月中旬に届けられたのが先に配布させていただいた“生徒へのメッセージ”です。3月3日には入院先の川崎医大病院の担当医から余命はどう持っても1週間とご両親には告げられていたようですが、本人には告げられないままその8日後の3月10日に逝ってしまいました。3月4日に私宛に送られてきた最後のメールには「明日から新年度だね。いろいろ大変だけどがんばろうね。」と書かれたものでした。

大学卒業後の12年は本当につらいものだったと思いますが、いつも明るく元気で、全ての保護者、生徒に愛され、慕われてきました。訃報を配布した3月13日以降、卒業生や保護者が続々とやってこられました。皆、言葉を失っていました。ここ数年は体力的な問題から、大好きな英語の授業を持つことも出来ずに、小5や小6の理社、中3の国語しか担当できなくなっていました。いつも授業への早い復帰を望んでいましたが、この1月には「こんな体になったらもう授業はできんかもしれん」とお父様に弱音を吐いていたようです。「先生は、赤字になっても生徒をホカす(やめさせる?)」と娘が心配してましたよ、とお父様から言われました。「そんな塾じゃけ～好きなんよ」と嬉しそうに言っていたとも。何事にも全力投球。手抜きを見たことはありません。

「〇〇(生徒)をやめさせようと思う」と相談すると、「私(吉村)、もう少しがんばってみます」といつも抵抗されました。“やめなさい” “やめる時期を探しているんだから無駄だよ” “その時間を他の生徒のために使いなさい” と言ってもがんとして聞き入れることなく、せつせと補習をしていました。どのケースもすぐに退塾の申し出(電話)があり、そのことを伝えるといつも本当に悲しそうにしていました。最後まで子供を信じる気持ちを失わなかったのは間違いありません。そのような人間に私はこの30年近い塾人生で初めて出会いました。信じる気持ちを強く持ち続けたために誰よりも多く傷ついたに違いありません。これまで吉村に育てられた生徒や卒業生達がその“遺志”を継ぎ、同様の思いやりと優しさを持って社会の役に立てる人間へと生長してくれると信じております。

強い意志と信念を持ち、常に人を気遣い、誰に対しても思いやりを持って接していました。短い34年半の人生を全力で駆け抜けて行ってしまったのでしょ。

幕山進学教室はかけがえのない大切な宝物を失ってしまいました。

合掌